

私がニュージールランドに住んでいた時、ニュージールランドの若者の日本研修旅行に同行したのが、私のリンダ一家との出会いでした。日頃時間など気にしないのんびりしている若者が、朝五時集合のずっと前から空港に来ていて、さすが今日は違うと、私を感心させました。でも一人だけ、なかなか姿を見せないのが、リンダでした。

寝過ごしたのかもしれないと思い、電話しようとした時でした。

「すみません。遅くなりましてー」

と叫びながら、四、五才くらいの男の子と手をつないだ小柄な女性が走って来ました。その女性が肩でハアハア息をしながら、

「タベ、姉さんを見送りに行くのだと、あんなに楽しみにしていたのに、なかなか起きなくて」

と男の子の頭に手を置くと、その子は恥ずかしそうに彼女の背後にしがみつきました。次いで、もう少し大きな男の子とリンダが走り着きました。そして、スーツケースを持った男の人と、赤いリュクサックを手にした十才くらいの男の子も到着。一目でこの一行がリンダの家族と分かりました。三人の弟さんは、背丈が少しずつ違うだけで姿形がそっくり、思わず絵本の金太郎を想い浮かべたほど、丸々と健康そうに育っていました。子どもたちとは対照的に小さく痩せた両親、両親より遥かに背が高いリンダ。日本研修に旅立つ若者の中で、家族の見送りを受けたのはリンダだけでした。でもリンダは気まずそうに友だちの陰に隠れ、わざと家族を無視している様子でした。

別れ際、「私たちの娘が日本に行けるなんて、私はあの子の年に、あの子を生んだのに、大きなお腹を抱えて、ジャングルの中を逃げ回っていたのに」とつぶやき、涙をばらはらと流したお母さんにも、リンダは一瞥もせず、機上の人となりました。

一ヶ月近い研修を終えて帰国した時、またリンダのお母さんと三人の弟さんが空港に出迎えていました。お母さんは、

「主人も来るはずでしたけれど、仕事で」

と私に挨拶しかけたものの、

「無事に帰って来て」

と目が涙で潤み言葉が途切れてしまいました。

リンダの大きなスーツケースがベルトコンベアーから流れて来ると、弟さん二人が走り寄って、抱え下ろしました。待ちかまえていた一番下の弟さんが、スーツケースを開けようとし、慌てて止めた一番上の弟さん、「家に帰ってから」と宥めたのは真ん中の弟さん。それを見ていた仲間の一人が思わず「かわいい」と言うと、リンダは顔を真っ赤にして、その場からいなくなりました。

リンダの両親は、カンボジア難民でした。両方の親兄妹も親戚も、肉親は内戦でことごとく殺されたそうです。

一九六五年に始まったベトナム戦争に振り回され、三〇年も続いたカンボジア内戦。一九七〇年のクーデター、一九七九年のプノンペン陥落。一九八〇年頃から、ポル・ポト派による二百万人以上（当時の国民の六分の一以上）の大虐殺のニュースが、世界を駆け巡った記憶が蘇ります。

教育や技術、地位のある大人は都市から農村に強制移住、知識階級は反乱を起こす可能性ありという理由で皆殺し、反乱を企てた農民も殺害。子どもは親から引き離されて、農村や工場での労働や軍務を強いられ、学校教育が受けられなかったと、聞きます。人々は、地雷やポル・ポト派兵士による攻撃・暴漢などに遭う危険を冒して、タイ国境を目指しました。

リンダの両親もその中にいました。ジャングルで食べられるものを探して空腹を満たし、身重の体を沼や川に浸し、根や蔓に引っかかって転びながら、何日も彷徨い歩いたそうです。タイ国境にあふれた難民にとって、第三国定住は夢、生きる希望でした。タイ政府から、第三国定住の面接資格証を受け、各国政府に定住を申請、面接を受けました。定住許可が得られれば、一時滞在施設で、定住先に適応できるよう外国語教育を受け、定住国の難民受け入れ施設へ向けて出国。

リンダの両親もその過程を経てニュージーランドにきました。着いて間もなく、リンダが誕生し、お父さんはそんな妻子を抱えて、食堂の厨房で働き始めたそうです。

ニュージーランドに来たカンボジア難民で、未だにあの悪夢から立ち直れず、新天地にも馴染めず、生活保護を受けて、虚ろな日々を送っている人が少なくありません。それに比べ、リンダ一家はいち早く生活の基盤を築き、生き活きとしています。お父さんは今では、四つのレストランの経営者です。子どもも増え、高等教育を受けさせることが出来るようになったのが夢のよう、嬉しいと、お母さんは涙します。

私がニュージーランドを去る少し前、リンダが大学を卒業しました。卒業式に、カンボ

ジア女性の正装、サンポット・ホールという絹緋の腰巻きに絹織りの上着を着たリンダは、振り袖やチヨゴリ、サリーなどの民族衣装で着飾った卒業生の中でも、ひと際あでやかで、相変わらず恥ずかしそうに伏し目がちなのが、かえって美しかったと、聞きました。もちろん一家揃ってリンダの晴れ姿を見に行き、お母さんの涙腺は緩みつ放し、お父さんも目を何度か押さえていたそうです。

残酷で残忍な戦争で、まだ子どもの時分に肉親から引き離され、学校に行けないどころか、生命の危機に立たされ通じたった青春。新天地に来て新たな家族を作り、生活の地盤を築いたリンダの両親。家族の絆を何よりも大切にし、平和の中で、子どもを育てる喜びをかみしめ、感謝し涙するのを、大げさな、と笑えるでしょうか。そんな両親を恥ずかしかる娘の若さ。でも社会人となったリンダが、両親を誇りに思い、人々に両親のことを堂々と語る日も近いことでしょう。